

絶句を褐色の黄河に残して

そして僕のどこかでスイッチが切り替わる。

黄河の流れをあとにして、繁華街の方へと歩いていった。しばらくぶりの都会に戻ってきて、その繁華街のざわめきの方へとまるで吸い寄せられるように歩いていく。中山橋から南へと伸びている大通りは中山路。そして中山路を少し南に下ったところから東の方へと張掖路と名付けられた大通りがあり、その張掖路とその中途から南へと伸びる酒泉路が蘭州の繁華街だ。日本から持ってきたヒゲソリがだめになってしまったので、それを買うこと。そしてこれが本日のメインテーマだけれども、放音機（ヘッドフォンステレオ）を買うこと。

中山路から張掖路へと入ってしばらくすると、にわかには賑は賑やかになる。百貨大楼や大きな商場、銀行や新華書店、食料品店、あるいは食堂などが並んでいて、人々で賑わっていた。

まずはヒゲソリと思いながら歩いてみると、たまたま大きな日用雑貨の商場があったので入っていった。ガラスケースの陳列台とそのうしろにひかえる女性服従員。陳列台を覗きながらたどっていくと、石鹼などの洗面用具とともにカミソリ類が並んでいた。調べてみると、ジレットの替え刃もあつたけれども、五個入りで一四元。高いしもまた柄との接合が合わなければいけないので、たまたま目についた中国製のヒゲソリを買うことにした。刃は交換できるようにはなっていない使いきりのカミソリだったけれども、一個一・七元。さもめんどくさそうにカミソリを陳列台から取り出した服従員はお金を受け取ると、あらぬ方を向き知らぬ顔をしながらおつりを投げてよこした。最悪だ！

「最悪だ！ 最悪だ！ …」と心の中で眩きながら歩道を歩いていった。と、ふと、このように心が泡立つような経験をすることもなにか久しぶりのような、なにかなつかしいことのような気がして、そのことに気づくや否や腹立ちはずぐに消えてしまったのだった。

しばらく歩いていくと百貨大楼のような大きな建物があり、買物客で賑わうその前広場にいくつかの衣料や日用品の露店が出ていた。見るともなく眺めていると靴の下敷きが目についた。布製の物で靴の中に敷く物なのだけれども、実は長旅のためか僕の靴はいつも湿ったような臭いような感じで、それを敷いてみればいいのではないかと、ふと思ったのだった。一セット二・五元。

さていよいよ放音機、ということとで商店を覗きながら、張掖路から南へ酒泉路へと入っていった。電気製品の店や大きな商店、百貨商場など

を見つけるたびに中を覗いてだいたいの値段を調べる。ごくたまには輸入品専門の高級電化製品の店があり、主として日本製のステレオセットやテレビ、ビデオなどを置いてあるのだけれども、もちろん僕にはお呼びではない。中国製のヘッドフォンステレオで少し図体の厚ぼったい旧式のタイプで一〇〇元くらい。最新式のスマートなタイプは一三〇〜一五〇元だった。どうせ買うのならとスタイルの気に入ったスマートな方をと決めて、実際にふたつほどの商場にあたってみた。ひとつはSUNNY製のもので一四〇元、もうひとつはJW京華という商標の京華電子有限公司製のもので一三〇元。機能や音は変わりがないようだったので、JW京華の方にした。ソニーの名前にすり寄ったような物よりも自主独立のイメージがイイと思ったからだ。

音楽専門店（カセットテープだけ）でテープを買う。ロックシンガー崔健の「解決」というものと大ヒット香港歌謡集「香港93第二季十大中文金曲」ともに八・二元。香港歌謡のテープは昆明の露店で別のもので買っていたのだけれども、いまひとつ音が信用できないような気がしたのだ。

ちよつとした買い物に心も軽く家路につく。酒泉路の中ほどにひときわそびえる蘭州百貨大樓の脇のバス停から東へ一直線に十分ほど。蘭州飯店前のロータリーに面したバス停の脇に出ている露店でヨーグルトを食べた。牛乳ビンに入ったヨーグルト（〇・七元）でとてもおいしかった。

ドミトリーのベッドに横になって、さっそくカセットの音楽を聴きながら西安の情報を仕入れた。というのも明日の朝、一〇・三八にはもうこの蘭州を出発して西安へと向かうことになっていたので。

ドミトリーの部屋には三々五々いろいろな国々からやって来た若者たちが戻ってくる。しばらくすると日本人もひとり、ふたり。軽く挨拶をし、そして旅の情報交換。ここ蘭州から西へ、シルクロードへと向かうもの、そして中国のふところへと帰っていくもの。いろいろな旅が病院の大部屋のようなドミトリーの部屋には交差し、雑然とぐずまいているようだった。

同室になった日本人三人で近くのレストランで夕食。食堂というよりももう少し高級なレストランという感じの店で、それでもおかず三品と飯と甘いお茶とで一人一三元。帰りにホテル前の露店で煙草（蘭州、〇・八元）。安いけれども包みのセロファンのない、紙のパッケージが剥き出しの煙草だ。

たつぷりとしたお湯のシャワーを浴び、久しぶりにヒゲも剃って、さっぱりとして、ベッドに横たわった。ドスの効いた崔健の歌声を耳にしながら。

※

六月一五日（火）朝八時前。蘭州飯店のドミトリーを抜け出して、天水路を北に向かった。列車の時間が気にはなっていたけれども、もう一度黄河の姿をこの目におさめておきたいと思ったのだ。

人気の少ない、なにかがらんとした印象の天水路をとつと歩いた。街路樹の両側には大きいけれども少しくすんだような建築物が続いていた。黄河まではほんの目と鼻の先というように思い込んでいたのだけれども、実際に歩いてみると意外に時間がかかる。おまけに地図を良く調べてみるとその付近で黄河は大きく北に蛇行し、天水路と黄河の間は雁灘公園という大きな公園になっているのだ。雁灘公園に入って、公園を突っ切れば黄河の岸辺に出られるようだったけれども、時間が気になったのであきらめることにした。代わりに、公園前の食堂で朝食を食べた。食堂前の歩道に並べられたテーブルに腰を下ろして、牛肉面とゆで卵を注文。熱い牛肉面にゆで卵を落して食べた。

雁灘公園前の食堂を出て蘭州飯店への戻り道、このようにして歩いていくその背後に僕は何か大切なものを置き去りにしているのかもしれない、という気がした。それが何なのかは分からない。昨日、黄河を目前にして漠然と考えをめぐらしていたようなものなのか、それともその考えのずっと彼方にあつて届き切れないものことなのか、あるいはほとんどずっと近く引き寄せて考えなければ見えてはこないものことなのか、さしあたっての僕には分からないとしか言いようがない。ただ漠然と感じているその何かをあとにするにあたって、このようにあつきりときびすを返すというのも、今の僕には良く似合っているのかもしれないという気がした。おそらく意味とか価値とかいう粘着性の強い思考からはそのリアリティーは捉えられないという気がするのだ。

僕があとにするのは黄河、そしてそれに接続する砂漠、あるいはチベット高原。それらと僕との間にはおそらくとても大きな非対称性がある。その非対称性は僕という言葉の秩序にとつては〈沈黙〉だ。しかもそれは僕の外部に実在するものとしての〈沈黙〉というリアルを他ならない僕自身に差し向ける。そのときリアルとしての〈沈黙〉が自らを求心力として粘着するのは意味とか価値としての言葉、そして自らを組織するのは物語やロマンに他ならない。そのとき〈沈黙〉として実在する

ものは物語やロマンとして外部に実在するもの変わる。そして僕は自らを批判することになる。自己批判の自己撞着だ。ロマンに擬態した自己批判と呼びかえても良いかもしれない。外部というものになんらかのリアルがあるのか、その言葉が意味を持つものなのかどうか、今の僕にはなんとも言えない。ただ外部というものは必ず擬態するものだという事は知っていないなければならない。それは言葉として僕自身の求めるロマンとして僕自身の視界へと入ってくるからだ。砂漠やチベットにおいて、人はどんな物語やロマンをもそこに読み取ることができる。それはそこに言葉の非対称性が大きいということに他ならない。しかしそこで人が語るロマンにはそんなに確実な意味があるわけではない。むしろ砂漠やチベットそれ自体と人が語るロマンとは何の関係もないという方がおそらくは正しいのだと、僕は思う。とは言っても一切のロマンを脱した砂漠やチベットというものを語ることができるかどうかということには留保が必要だとは思うけれども。

「中国散歩」と僕は思う。ごく軽い足取りで来て、くるりときびすを返すのだ。「砂漠の唯物論」ともまた、僕は思う。砂漠は体系へと粘着しない。言い替えれば、砂漠には意味がない。それは物語を分泌しないし、歴史へと配列されることもない。砂は自由にその位置を変え、位置に縛られることはなく、またその位置にアイデンティティーを持つこともない。しかしながら今の僕にはその言葉によってなにかみつとることができるのか分かっているわけではないのだ。おそらくずっとあとになって、こういうことだったのかと自らの感覚を理解するときが来るだろう、そうであれば良いとは思うけれども。

そして僕は西安へと向かう。同室の旅行者たちに軽く挨拶をして、蘭州飯店をチェックアウト。路線バスに乗って、蘭州火車站へ。僕が向かうのは堆積した歴史の街、かつて長安と呼ばれ、日本の古都の模範となった街だ。歴史との出会いは旅の目的ではないけれども、もちろん厭うこともない。しかし僕が求めていたのは対称的な関係とでも言うべきものだ。いわば人間を、感情を求めていた。チベット高原、そして砂漠という地理を旅してきたからか、それとも困難な自然の条件にもかかわらず感情的には比較的平穏な旅が続いたからか、僕は西安に中国というものを求めていた。それは歴史としての中国ではなく、いわば「没有（メイヨウ）」としての中国だった。初めて中国大陸に足を踏み出したときにはとんでもない違和感として感じられたことが、今は不思議になつかしくも、また親しくも感じられるのだ。しかも敦煌で一緒だったヒゲとスカシの情報によると、西安の郵電大樓前の地下には『透明人間』が出没するのだという。

まだ見ぬ『透明人間』への思いを乗せて、蘭州発、浦口行き
の硬座車
両はごとりと動き始めた。